

『大内裏図考証』の成立について

——裏松固禪の製作と内藤広前の補正——

福 田 敏 朗

1. はじめに

『大内裏図考証』は、平安京大内裏建物の復原研究の基本文献であるばかりではなく、建築史研究の端緒を切り開いた研究であり、その史料価値は高い。ところが、あまりに詳細を極めているために、文献面からの平安京大内裏建物の復原に関しては『大内裏図考証』以後の研究に進展がみられないと言っても過言ではない。現在、『大内裏図考証』は「故実叢書」に収められたものが広く知られているが、これは内藤広前の補正本であり、裏松固禪の著作そのものではない。また、「故実叢書」の凡例には「惜しむらくは写本を以て伝へしめ往々にして魯魚の誤りあり」とあるから、『大内裏図考証』そのものの検討も必要がある。^(注1)

この点から、筆者はすでに裏松固禪自筆の『大内裏図考証』が刈谷市立図書館・宮内庁書陵部・東京大学史料編纂所に所蔵されていることを報告し、また寛政9年(1797)に朝廷に献上された『大内裏図考証』が櫃と共に宮内庁書陵部に所蔵されていることも明らかにした。^(注2)

ここでは、まず裏松固禪の『大内裏図考証』製作過程を紹介し、次に内藤広前の補正の経緯について明らかにする。

2. 裏松固禪と『大内裏図考証』

裏松固禪(1736~1804)は京都生まれの公卿で、幼い頃から学問に励み、有職故実に詳しくかったといわれている。彼の青年時代は、京都朝廷と江戸幕府の関係は平穏というわけではなく、朝廷では天皇側近の公卿達によって権威の高揚が折りにふれて行われるという時代であった。このため、幕府との関係悪化を心配した朝廷の穩健派が、幕府と共に天皇側近の公卿達を遠ざけるために弾圧した、いわゆる「宝暦事件」(宝暦8年・1788)が起こり、裏松固禪は事件に連座し宝暦10年に蟄居・出家を命じられた。

その後、彼の名が世に出るのは、天明8年(1788)1月晦日の京都大火で焼失した御所再建時のことであり、この間に固禪の研究が進められていたのである。

固禪の研究開始時期は定かでないが、史料収集は天明年間(1781~89)の初めには終了していたようで、まず皇居の変遷を調べた『皇居年表』の作成にかかる。『皇居年表』は天明4年3月19日に朝廷に献上される。

続いて『大内裏図考証』の取りまとめにかかり、天明8年頃には現在見られるような三十卷五十冊の構成で編集され始めていた。当時は筆での書写であるから、清書には2~3年を要しており、『大内裏図考証』そのものの完成は天明末年頃とみられる。

まさに朝廷で裏松固禪による大内裏の研究が話題になっていた時に、天明大火が発生したのである。御所再建にあたり、朝廷側から紫宸殿・清涼殿は規模が縮小されていることから、いろいろな儀式に差支えがあるとして、平安時代の古制によって再建して欲しいことや、紫宸殿南庭の拡張・女院御所の再建等についても要望がだされた。朝廷側の旧制復古要望の具体的資料になったものが裏松固禪の平安京大内裏についての研究とみられる。幕府側の造営責任者であった老中松平定信は、朝廷側の要望に対し、旧制復古は認めるにしても、まったく平安時代と同様に復すのではなく、時代背景や財政状況に応じた復古の在り方を説き、紫宸殿・清涼殿を中心とする一郭の復古が実施されることとなった。

御所の造営は寛政1年(1789)3月から始められ、同2年8月26日に上棟式が行われる。御所の旧制復古に貢献した裏松固禪は、寛政6年5月に『大内裏図考証』を献上する旨の命を受け、同9年12月10日に『大内裏図考証』三十卷五十冊を献上し、13日には褒美として錦5把、銀10枚を受ける。

以上のように、裏松固禪の『大内裏図考証』は、朝廷側の御所旧制復古の要望の具体的資料となって世に出たものといえよう。

3. 内藤広前と『大内裏図考証』

内藤広前(1789-1866)と『大内裏図考証』との関わりについて、「故実叢書」の凡例には「文化年中尾張侯のために、『大内裏図考証』を校訂し、その誤を正し、足らざるを補ひ、新たに全図九巻を製作し、これを添えて以って完璧としたり」とある。また『国学者伝記集成』には「文政の頃、尾張侯にて、裏松家の『大内裏図考証』の板を買い入れられしが、原本の引書、その他誤謬あるを校訂すべき由命ぜられ、多年の間、その邸に往来して、校訂成就せり」とある。これらから、内藤広前は文化あるいは文政の頃に、尾張侯の命により『大内裏図考証』を校訂したとみられるが、なお詳細は詳らかでない。ここでは内藤広前の補正作業について述べる。

内藤広前の補正作業を明らかにする史料は、名古屋・蓬左文庫所蔵の『大内裏図考証』である。蓬左文庫には『大内裏図考証』96冊が架蔵されている。この96冊の内訳は、『大

内裏図考証』30巻50冊・『同目録』3冊・『同引書目録』1冊・『同統録』1冊・『同別録』2冊・『統大内裏図考証』1冊・『別巻』10巻10冊(以上65冊, 以下「I本」と呼ぶ)・『大内裏図考証補正』30巻・『同目録』1巻(以下31冊, 以下「補正本」と呼ぶ)である。

「I本」はいわゆる『大内裏図考証』の写本であるが、表紙や本文には様々の書き込みが施されている。表紙には、当該巻に用いられている引用書が書き上げられ、校合の進行状況が記録されていたり、校合の期間、清書の年月等が記入されており、「補正」に用いられた本そのものであることが理解される。

「補正本」は全31冊で、その内訳は『目録』3冊、『引書目録』1冊、『本編』巻1上から巻14迄の内の26冊及び『統大内裏図考証』1冊、『統録』1冊で完本でないのが惜まれる。本編は裏松固禪が著した本文が紙面の下方4分の3をしめ、上方に朱筆で追加すべき史料及び「広前按云々」として広前の考えを記している。この朱筆で書き込まれた内容は、「I本」の中で余白に書き込まれていたものとほぼ同内容である。

この「補正本」の「巻1上 都城左京」の巻頭に「大内裏図考証補正のはしがき」という一文があり、これにより内藤広前、すなわち尾張藩による『大内裏図考証』の補正の経緯が明らかになる。

「大内裏図考証補正のはしがき」

延暦といふとしの十あまり三とせといふに
山城国の葛野の郡に大宮はしらふと
しきたて賜ひ常盤かきはにうこきなき
宮所をそ志め賜ひにけるそのころ世にハ
平安城と申けるとかや今ハつたへて大内裏
とも申奉る比宮をおもほし立志ろし
めしけるハ桓武天皇とそ申奉る曾ハ今より
千とせあまり三十とせあまり二とせの昔に
なんありけるその御時よりそ世々のみかと
ひとつ宮にあめの下志ろしめしける
御定めとはなさしめ賜ひにけりそれはた
世々をへて宮をハ宮としなからその大城の
うちにまたかり宮をここかしこに迂し
賜ふことハなりにけり閑院の内裏三条二条
あるハ堀川院なんといひてあまた所々御代

ことにかへ賜ふこれを里内裏とそ申奉る
それが屋かてうつろひつ々今の太宮にそ及び
ましまじける寛政の頃かとよ神なからなる
みかとの御ところにしもおほしめしける
ことこそあなかしこかけまくもかしこきかも
かの平安城の太宮はいかにありけらしと
むかしをしのはしたげにの賜ひけるをその
御時に裏松の固禪入道とか申奉るこの
大内裏図考証三十卷五十冊また別録とて
拾卷をそえり出でて奉まつれりとそうけ賜り
伝へ奉ることに將軍家につかへ奉る屋代の
弘賢と申かこの御殿へもかよひたてまつれり
それが文政といふとしの九とせにあたる冬の
ころかこの五十卷別録十まきをも具して
奉れりこはいかにめつらかなるものならん
見よとておふせことうけ賜ハリをかみ奉るに
げに聞き伝へたるよりもかしこくつはらに
えりと々のへたるものにそありけるか々るふみを
して御文くらに納めおき賜はれなかき世の
屋たからとも申へし志かりとてこのま々に
納めたまハ々後の世に見ん人のまとひとハ
なるめりいかにともなれハうち見るに文字の
たしかならぬはたことわりのおたやかならぬそ
ましけりこハこのぬしの志はさにハ
あらしうつしもて伝へたるとき乃あやまち
にそありけらしあなをしのわさやとなけき
奉れはいかにしてもしてと々のへ奉れとの賜ふ
されはよわか皇国学に志しあつく太宮の
うちとののこともくわしくつとめつとむる
広前とか申ものありけるとそうけ賜ハる
それなんめしてこ々ろみんとてめせハあな
かしことてつ々しみうけ賜ハるこれが申伝るも

ぬしのの賜ふことあなをしのわさやといふ
 さらハこれをた々さんにはいかにかすると々へハ
 まさしくこれに引もちひたるもとつ文に
 かえり見た々したらんには何事かこれに
 過さらんかつはふるきあとある年中行事
 てふ絵巻ハさることにて何かしくれかしの
 ふる絵物かたりにありとある宮のかたもて
 うつしいててここに宮室図とてかの入道のものもし賜へり
 ものありなんそれも年中行事絵巻
 よりはしめてふる絵もの絵画もてうつしいてたるものなから
 世に伝へたるハ画からあまりにはふきたれハ宮殿
 楼閣のおもむきもさたかならずさて広前かくいふにそ
 ありけるにてこたひハその画からをほふかすそのうへに
 ことを加へしものしそのうへに大宮のまた□図
 奉りたりけり

ひきそへて奉らハいとみやすかるへしとことふ
 その故を申奉れハよかなりとておふせこと
 承賜るさてこの文奉れるあくるとしの
 きさらきの程よりおのか家にあるし志て
 二とせはかりひるいすからに夜をかけてそ
 つとめけるさるほとに何くれとなく御くら
 の御ふみとも数多もていてつみたるか中にハ
 ことに尊きもありけりよのつねならぬ
 かくつちのあらそひもあらハいかにかせまし
 とせちに心くるしけれハひろき御殿の
 人気遠きあたりにうつしもてせまほしと
 ねかい奉るまに 寝殿の南西の向ひ
 なる所に校合所といふ所をぞ設たまひ
 つ々そこにておのか下つかさなる人たち五人
 六人とかの広前と昼すからいそしみつとめ
 奉りし十あまり二とせそつものにける比程ハ
 やくなかのきよかきもいてきそれかた々しも
 大かたにいてきにけりさてこそこよなき
 たからの御ふみとハなりけれかくてハおふ
 やけのかためともなり後のよの人のまとひも
 あるましくそおほゆるあなかしこ かく申

奉るハこのこととりあつかひ申へきむね
うけ賜ハる山本の長方天保九とせといふ
としの睦月はかりの事にてそありける

この「はしがき」と「補正本」に書き込まれた年月日から、内藤広前の補正作業を再現してみると次のようになる。

1. 文政9年(1826)冬に国文学者屋代弘賢によって尾張藩に『大内裏図考証』30巻50冊・『同別録』10巻がもたらされた。
2. この『大内裏図考証』には、写本時の誤りと見られるものが多く、たいへん惜しいので、山本長方が整えることを命じられた。このため内藤広前を召して、引用されている文書を読み返したり、絵巻物を見たりして補正し、かつ図面も作ることにした。
3. 文政10年2月から山本長方の家で作業を開始し、2年ほどは昼夜兼行で仕事が行われた。藩の文倉から文書を持ち込んだりしているうちに、部屋が狭くなってきたので、御殿の寝殿の南西に校合所を設けてもらい、内藤広前と長方の配下5～6人で昼間に作業を続けた。
4. 天保8年(1837)の始めには「再校」が終了し、続いて3月から「中清書」が開始され、天保9年1月には大方完成した。

補正の大要は以上のとおりであるが、「卷十上 紫宸殿」の本に書き込まれた年紀からもう少し詳しく作業の内容をみてみよう。

- 1 (天保2年) 卯八月出来(補正の内容不明)
- 2 (天保4年) 巳十月十二日始メ十一月二日図トモ校合了
- 3 (天保5年) 午五月三日書改メ出来
- 4 (天保6年) 未六月十二日□出て清ス、十九日首書識元出首書吟味識□者清スヘシ
- 5 (天保6年) 未六月廿七日首書出来して校合了 但未し方三四ヶ所いまだ首書見合にて并本文元出無し不審之条 沢山にて□追々吟味
- 6 (天保7年) 申八月十四日教典の校合はじめ十七日了 不審のもの多し
- 7 (天保9年) 中清書再校閏四月廿一日始メ廿四日了 書尚し八枚あり

このように、何度も吟味、書き改めが行われたことが明らかとなる。このほか、「教典檢了 不當のもの多し」「未見并校了不審のもの云々」という書き込みが処々にみられる。これらの書き込みは文字通り、確実に補正が出来なかった部分があることを示しており、内藤広前の補正には限界があったことを示している。

内藤広前が補正を完了した時期については史料が無く定かでない。しかしながら、天保

9年1月からそう時間を経ずして完了したことは確かであろう。この「補正本」が完全に残って無いことが惜しまれる。この「補正本」の写本が「故実叢書」本の原本であろう。

4. おわりに

『大内裏図考証』はその史料的价值の高さに比して、そのものの検討が遅れている。ここでは、『大内裏図考証』が裏松固禅によって宝暦末年から天明末年にかけての約三十年間をかけてまとめあげられ、続いて内藤広前により、文政10年から天保9年にかけての十数年をかけて補正が行われたことを紹介した。

(福田敏朗＝京都府教育庁文化財保護課技師)

注1 石村貞吉「大内裏図考証と大内裏図」(『史論』6 1958年6月), 同「二つの書翰」(『史論』7 1959年7月)

西井芳子「裏松固禅の自筆遺稿」(『古代文化』20巻4号 1968年4月)。

注2 拙稿「裏松固禅自筆の『大内裏図考証』について」(『日本建築学会東海支部研究報告』19号 1981年2月)。同「寛政九年献上の『大内裏図考証』について」(『古代文化』34巻3号 1982年3月)。